

『俺たちの日常にはバッセンが足りない』（三羽省吾/双葉社）

書店員のレビュー抜粋

・バッティングセンターを街に取り戻すためのかなり無謀な大作戦。周りの人々をまきこんで大きな波を起こしたエージがすごい。「バッセンってなんだったっけ？」と思いながら読み始めたのに、読み終えた時は「バッセン最高！」になっていた。

・足りないから始まる様々な計画にワクワクしました。時おり、学生時代に戻ったようで、なつかしい空気感がたちこめ、無謀とも思える要望に応えたいくなるのもわかる気がしました。他人でもちゃんと自分のことを、想ってくれる信用できる人間がいるんだと、思わせてくれる良い作品でした。

・どうしてもないはずのエージが魅力的でとても好きだったし、お話しのテンポもよく楽しく読めた。バッセンを作るためだけの話だけでなく協力者たちの話も同じくらいよかった。

・いろんな形のやさしさがエージの周りにあって、よかった。空振りばかりでも、いつかはホームランが打てるかもしれない。まっすぐ前を向いて打ち続けている人が最後には報われる、頑張っていればきっと大丈夫だと信じられる1冊。読後は「カキーン」というホームランの音が心に響くような、胸がスカッとする作品です。

・エージという端から見たらろくでもない男。しかし、途中から主人公のシンジ以外のミナやアツヤ目線で話が進んでいき、シンジの知らないエージの過去や心情が分かっている、読んでいくうちにエージに対して愛しさが出てきました。自分の街にも新しいものがどんどん増えていく中で、大切な物を失わない様にしたいと思える小説でした。

・エージの底抜けにバカで突拍子のない性格は、周りを常に巻き込み、目まぐるしく進んでいく展開はただただ面白く、気付けば読み終わっていました。一方、人知れず抱えている苦しみは、周りが誰一人として見逃さず、様々な方向から救おうとしていて、不器用な人の温かさがてんこ盛りな1冊でした。

・バッセンって何？ あ、バッティングセンターなんだ。から始まりスポーツ小説？ 青春もの？ いや違う。でもやっぱり第二の青春を感じました。愉快で切ない。私のバッセンは何だろう。

・ひとりの思いつきがみんなで進めば夢は実現可能性がある。過去と向き合い、ちよっとミステリアスな雰囲気もあり楽しく読めました

・普段は気にしていないバッティングセンターが急に気になる。それぞれの登場人物の背景と展開に、彼らのその後も読みたくなった。

・まさかバッセンを作るのか？ そんなサクセスストーリーなのかと思いきや。側から見れば奇想天外、飽き性の気分屋。そんな一癖あるかつての同級生の本当の姿を知った時に、思いがけない感動がありました。

・子ども時代に困難を抱え、大人になったエージが、極端に美化されるわけでもなく、変わり者のまま友人たちに受け入れられている姿にとっても温かい印象を抱きました。読んでいると確かにバッセンが足りないのかもしれないという気持ちになります。

・人を表面上で判断してしまいがちな私たちの社会。今までであって来た人の中にもこう言う人がいたのだろうか、思い返してみました。人のことを考えながらも照れや、屈折から素直になれない、こう言う人、好きです。

・バッセンといういいかたを初めて聞いた。それくらいバッセンが世の中からきえているのか。それとも私がかかわろうとしなかったからか。

重苦しい書き口が苦手なこともあり、ほかの文章よりも明るく読めたように感じる。